

獨協大学長 殿

# 学外研修報告書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

|                                                                                                                                                                                                                               |                                                            |        |                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 報 告 日                                                                                                                                                                                                                         | 2026 年 4 月 21 日                                            | 所 属    | 外国語学部ドイツ語学科                                                                               |
| 職 名                                                                                                                                                                                                                           | 准教授                                                        | 氏 名    | 黒子 葉子  |
| 研修種別                                                                                                                                                                                                                          | 1. 海 外 2. 国 内                                              | 研修種類   | 1. 長 期 2. 短 期                                                                             |
| 研修期間                                                                                                                                                                                                                          | 2025 年 4 月 1 日 ～ 2026 年 4 月 1 日                            |        |                                                                                           |
| 学外における主な研修機関および訪問先<br>ドイツ連邦共和国 テュービンゲン大学                                                                                                                                                                                      |                                                            |        |                                                                                           |
| 出張目的または研究題目<br>ドイツ語のインターアクションにおける言語と文化のあり方に関する考察                                                                                                                                                                              |                                                            |        |                                                                                           |
| 資 格                                                                                                                                                                                                                           | 1. 2025 年度獨協大学学外研修員（派遣）<br>2. 本学承認の学外研修員（自費等）<br>3. その他（ ） |        |                                                                                           |
| 大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額                                                                                                                                                                                                       |                                                            | 300 万円 |                                                                                           |
| 研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入）                                                                                                                                                                                      |                                                            |        |                                                                                           |
| 1. 研修経過の詳細                                                                                                                                                                                                                    |                                                            |        |                                                                                           |
| 本研修では、ドイツのテュービンゲン大学 (Eberhard Karls Universität Tübingen) において、語用論および会話分析の観点から、ドイツ語のインターアクションにおける「反復」の機能に関する研究を行った。反復は先行する発話内容を繰り返す行為であるが、会話において多種多様な機能を持つことが知られている。また、反復をとりわけ積極的に使用する言語もあれば（例：日本語）、反復が否定的に評価され使用を避けようとする言語も存 |                                                            |        |                                                                                           |

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

在する（例：アメリカ英語）。このように反復は、言語の背景にある文化や価値観を反映するコミュニケーションスタイルの事例のひとつとして捉えることができる。滞在期間中は、大学図書館を利用して関連分野の文献収集・調査を進めるとともに、ドイツ語会話データの分析を継続的に実施した。特に、会話における other-repetition（他者発話の反復）と self-repetition（自己発話の反復）に焦点を当て、その機能、形式的特徴、統語的単位、発話のタイミングについて検討を行った。さらに、会話参加者の関係性（初対面、友人関係など）が反復の使用に及ぼす影響についても分析を進めた。その結果、ドイツ語においても反復が対人関係の調整という側面で大きな役割を果たしていることが明らかとなった。

1 月には、所属先の研究コロキウムで研究成果を発表する機会を得た。1 時間半の枠内で詳細な口頭発表を行うことができ、研究科の教授陣、研究員、博士課程在籍者など多くの参加者から有益なコメントや質問をいただいた。このような意見交換や研究交流を通じて、相互行為言語学に関する最新の研究動向について理解を深め、ドイツ語の会話における反復の分析の枠組みを整理することができた。

4 歳の息子を帯同しての滞在であったため、当初から託児が一番の懸念点であったが、大学のファミリーサポート課にお世話になり、テュービンゲン市の保育園に仲介していただいた。そのおかげで平日の 7 時 30 分から 15 時 30 分まで息子を預けることができ、研究時間を確保することができた。4 月の時点ではドイツ語が全く理解できなかった息子であるが、バーデン＝ヴュルテンベルク州の言語支援のプログラムによって週 3 回専門のスタッフにドイツ語を教えてもらい、滞在終了時には保育園でほぼ支障なく意思疎通ができるようになったことも印象深かった。

## 2. 研究成果発表の予定

本研修において得られた研究成果は、すでに以下の 2 本の論文内で公表している。

「ドイツ語課題達成談話における他者反復と同時発話反復の機能分析 — 協調と対人関係構築の観点から —」 In: 獨協大学『ドイツ学研究』第 85 号、2025 年（単著）

「自己修復の方略としての自己反復 — ドイツ語課題達成談話データに基づく統語的・相互行為的考察 —」 In: 獨協大学『ドイツ学研究』第 86 号、2026 年（単著）

さらに、ドイツ語、英語、日本語の会話における反復の機能および使用傾向を比較する  
究として発展させ、言語学分野の学会および研究会で発表することを検討している。具体  
的には、今年8月の日本独文学会語学ゼミナール (Lingusiten-Seminar) にて、ドイツ語  
での口頭発表を行う予定である。

### 3. その他

本研修を通じて、海外の研究者との研究交流を深めるとともに、研究方法や議論の進め  
方について多くの知見を得ることができた。また、滞在中に築いた研究ネットワークは、  
今後の学術交流の発展につながるものと期待される。今回の研修で得られた成果を今後の  
研究活動および教育活動に活かしていきたい。